

現代日本のジェンダー変容と 『ここがヘンだよ日本人』

国広陽子



▶ 1 研究の背景

ジェンダーとは、これまで絶対視されていた性差や性役割を相対化する概念であり、一般的には社会的、文化的性別・性差をさす。つまり、男女という性別に関連づけられた社会的役割や分業自体が可変的であることを示す概念である。二分法的カテゴリー化としての性別や、二分法に関連づけて測定される性差自体が階層的に構築されていることを指摘するために、第二波フェミニズム運動の中から生まれたwomen's studies（女性学）において、1970年代に再定義され、幅広い分野で用いられるようになった（上野，1995）¹⁾。

ジェンダー・ステレオタイプは、性別カテゴリー自体、およびそのカテゴリーに類別される個人の属性に関する認知的な信念体系を指す。ある文化のもとで社会成員に共有されている、性別化された身体的特徴、心理的特性、社会的役割、職業などに関する情報が含まれている。ジェンダー・ステレオタイプは性別・性差に関する知の体系のなかでも変わりにくいコアを成している部分である。ステレオタイプは一度形成されると、それが認知的枠組みとなって、当該カテゴリーに属するとされる個人に関する認知を歪める。カテゴリー成員がすでに社会的に不利な状況におかれている場合、否定的なステレオタイプイメージは、そのカテゴリーへの偏見や差別を温存し、助長する。性差別が解消していない社会では、女性に関する固定的ステレオタイプが性差別解消の阻害要因となる。またジェンダー・ステレオタイプに適合しない男女のパーソナリティや行動などが「女（男）らしくない」として差別や排除の対象となることも問題である。

ジェンダーとメディア研究では、ジェンダー規範や意識の変革を妨げる要因としてメディアにおけるジェンダー・ステレオタイプ表現が批判的に取り上げられてきた。マスメディアが表象するジェンダーイメージが当該社会に存在する性差別を正当化するとともに、社会成員が性別にとらわれない行動様式をとることを妨げる基盤を形成している

脚注

1. ジェンダーは文化的・歴史的条件に応じて変化し、その意味は言説をめぐる闘争と交渉によって構築される。マスメディアは、ジェンダーを社会的に構築する意味を巡る闘争の中心的な場であるために分析対象として重要である。筆者がポピュラーメディアとしてのバラエティ番組に注目するのも、バラエティの人氣が高く、番組がジェンダー構築の闘争の場であると考えた

めである（Zonenn, 1991 = 1995: 56-57, 笠間, 2001: 226-227）。ただし、1980年代以降、フェミニズムの立場をとらない場合でも、従来の「セックス」の代替としてジェンダーを用いる研究者もいる。この場合は、ジェンダーは価値中立的な二分法概念として用いられる。

と指摘された²⁾。また、テレビに限らず、子ども向けのホピュラーメディアは、紅一点の世界(「世界は沢山の男性と、少しの女性でできている」)を描いているとの指摘もある(斎藤, 1998)。

一方、ステレオタイプイメージは、あるテーマを描くのに用いられる映像表現上のテクニックとして用いられる。1950年代に日本で制作されたホームドラマ映画を分析し、ホームドラマという映画ジャンルの生成を研究した坂本佳鶴恵は、テーマを浮き立たせるために、登場人物の設定や役柄に意図的に典型的な対置をし、印象づける工夫をしていることを指摘している。つまり、「映画はさまざまなステレオタイプを利用していくことで物語を構成し、逆にさまざまなステレオタイプを確認し、ときには生み出してもいい」(坂本, 1997: 228-231)。同様にテレビ番組でも、ステレオタイプを利用して面白さを演出し、説明を省略する手法がとられる。ドラマでは、主役にはステレオタイプにあてはまらない外見や行動をとらせてユニークな魅力を際立たせ、わき役にはむしろステレオタイプイメージに合致した配役や衣装、小道具を配することがある(国広, 2001)。どのようなステレオタイプをどのように利用するかは、その番組がターゲットとする視聴者層やメッセージ、つまり演出意図と深く関わっている。

娯楽番組のジャンルでは、ステレオタイプが表現手法としてしばしば採用される。例えば、男性が女装して「女らしさ」「母親らしさ」などのステレオタイプを演じることで笑いをとる演出がある。古くは「8時だよ全員集合」でのドリフターズのいかりや長介による着物姿で割ぼう着をつけた母親役、最近では人気グループSMAPのメンバーである香取慎吾が、エプロン、ショッキングピンクのワンピースを身につけ、誇張された笑顔で演じた「慎吾ママ」などはその分かりやすい例であろう。

そのカテゴリーにまつわるイメージが世間の社会的通念として流通している場合、メディアのステレオタイプ表現は、問題のない当たり前のイメージとして受容される。国連を中心とした女性の地位向上を目指す国際的な取り組みは、性差別を解消するうえで、文化の中に埋め込まれた女性蔑視や固定的な性別役割分業を見直すことが重要だと指摘してきた。その際メディアにおけるジェンダー・ステレオタイプを変え、表現を多様にすることを重視している。

日本のテレビにおけるステレオタイプ批判として一般の人びともっともよく記憶されているのは、フェミニストグループによる1975年のインスタントラーメン「ハウスシャンメン醤油味」のコマーシャルへの抗議と、その結果としての放送中止であろう。「国際婦人年をきっかけに行動を起こす女たちの会」は、このコマーシャルが「私作る人、僕食べる人」として性別役割分業を固定化し、強化するおそれを指摘し、CMを変えるよう異議申し立てをした。

しかし、当時の日本のメディアは、これらの抗議行動に対して、一斉に誹謗中傷やからかいの記事を掲載した。同会の抗議行動や主張は「ヒステリック」「本質からはずれている」と紙面で非難された。その際、抗議行動に関する記事を掲載した週刊誌の多くが、有名女性にこの運動を非難させ、女性同士を対立させる構図を構成した(行動する会記録集編集委員会, 1999: 37-51)。当時のマスメディアは、性別役割分業を「常識」とする前提に立っており、女性差別の言説を読者が受容すると想定した紙面づくりをしていたのである。そして、男女の役割に関するステレオタイプを批判した女性活動グループの

脚注

2. テレビに関しては、子ども向けアニメにおいて主人公に男性が多く、若くスマートなヒーローが、女性と子どもを保護して悪人と戦うストーリーが多く、女性はその番組でも、長い髪、大

きな瞳、スタイルの良さといった外見的特徴と、男性に依存的な役柄であるなど、固定的なイメージで描かれていることが指摘された(井上, 1992)。

行動に否定的なステレオタイプイメージ（ヒステリックで極端な行動であり、ゆきすぎである）をはりつけることで、記事の姿勢を自己正当化した。差別される側からの異議申し立てがメディアで揶揄される際の典型的パターンであろう。

本稿では、この番組においてどういったジェンダー・ステレオタイプがいかに利用されたか、とくに女性のステレオタイプイメージの扱いの変化を、番組のタイトルテーマと、番組内での討論部分を中心にみていく。この番組の放送された時期はCMへの異議申し立てのあった1975年から4半世紀を経た時期にあっており、日本における男女平等政策の展開期とも重なっている。分析にあたっては、ジェンダー・ステレオタイプ概念を冒頭であげた内容より拡張してとらえ、現代日本社会の日常知において、性別および性差、男女の関係性に関して共有されている信念体系も含めて検討する。

▶ 2 番組の概要と基礎データ

1) 番組の概要

『ここがヘンだよ日本人』は、1998(平成10)年秋から2002(平成14)年3月まで、TBS系列で3年半にわたってプライムタイムに放送された人気番組であった。日本語の達者な日本に滞在する「外国人」を多数スタジオに配し、専門家（弁護士、医師など）やタレントとが設定されたテーマをめぐって行うスタジオ討論部分と、海外取材も含む外国や外国人、日本および日本人に関するVTRで構成される。総合司会は江口ともみ、発言者を指定する実質的な進行役はビートたけし、スタジオのコメンテーターとしては、レギュラーのテリー伊藤、RIKACOがおり、そのほかKONISHIKI、嵐山光三郎、そのまんま東、江守徹、福島瑞穂、家田荘子、安藤和津といった人びとがテーマに応じて起用された。週1回のレギュラー放送のほか、長時間スペシャル番組も編成された。放送日と番組タイトルは別掲の通りである（萩原論文巻末資料参照）。本稿では、収録ミスの4回を除く、146本を分析対象とする。

この番組を成立させた基盤には、アジア、アフリカ出身者を含めたさまざまな日本語の達者な「外国人」を50ないし100名、毎回スタジオに集合させることができるまでに「国際化」した東京の状況があった。地方都市にもさまざまな形で外国籍の人びとが移住し、職場や地域で日本語でコミュニケーションをとる機会が増え、外国人と言えば欧米人であり英語を話す人だという外国人に関する旧来のステレオタイプイメージを変えていった。

番組で「外国人」として発言する人たちは、国名を記した名札をつけ、発言時にはテロップで国名がスーパーされる。発言内容から推測するといわゆる「ハーフ」や「日系人」も含んでいるし、日本人と結婚した人もいた。「日本人」か「外国人」かの単純な二分法では類別できない存在（日本に定住しながら韓国・朝鮮籍をもつ、従来の意味での「在日外国人」など）はあらかじめ除かれ、日本人と外国人の二項だけを設定した番組である。日本に帰化した有名人は、コメンテーターとして起用され、「日本人」対「外国人」の対立を仲介する役割を担った。国籍を根拠に「外国人」と類別しているのではなく、日本および日本文化を自文化とはみなさず、日本人アイデンティティに基づいて行動しない無名の人びとを「外国人」と位置づけ、その「外国人」の目から日本文化・日本社会を見ることで、これまで気づかなかった自国の文化的特徴を日本人自身に自覚させようとする企画であった。そこには、スタジオに迎えた多様な文化的背景をもつ「外国人」の発言を借りて、異文化としての日本および日本人を自己批判するという制作者の狙いもあったろう³⁾。進行する文化のグローバルライゼーションが、実際にはアメリカ文化支配

であるとの指摘がなされ、多文化共生が求められたことも関係していたと思われる。

娯楽番組であるから、笑いや驚きなどの刺激をもたらすトピックスが選ばれやすい。番組スタート当初は異文化からみた違和感がある現象として、日本文化にとっての「常識」をとりあげることが多かった。番組には、家族や恋人の行動パターンの異文化間比較が視聴者の興味をひくであろうとの戦略があったようだ。妻がまずい料理をつくる、恋人と待ち合わせた男性の前に魅力的な女性が現れるといった共通のシチュエーションを設定し、複数の国で男性の反応を隠しカメラで撮影し、フランス、ケニア、イタリア、アメリカなど各国の文化の違いを見せる趣向もあった。夫婦や恋人など、男女の関係性をめぐる文化や価値観を比較して、男尊女卑の強固に残るアフリカ、リベラルなアメリカ、男女間の愛情関係を重視するフランスといった類型的表現がとられた⁽⁴⁾。

しかし番組全体から異文化理解という視点は次第に失われ、番組内容が変化していった。タイトルで「日本人」のサブカテゴリーについて極端な否定的イメージを強調し、当事者同士を対決させる場面の比率が増大し、とくに放送後半では、「ヘン」なサブカテゴリーとして女性が多く登場するようになった。

2) 基礎データ

基礎データとして、まず収録された番組内容を文字化したスクリプトを共同で作成した。番組は、スタジオ収録部分とすでに撮影されたVTRをスタジオ収録時に再生して出演者の反応を挿入する部分に大きく分けられる。スクリプト作成にあたっては、スタジオ収録部分をとくに重視し、発言者の氏名、外見および発言から判断した性別、テロップで示される国名と発言内容、発言時間を記録した。またVTR部分については、内容、時間、テロップ化された情報を要約して記録した。この作業によって、番組を量的かつ質的に分析することが可能になった。分析にあたってはスクリプトに基づいて作成された基礎データと録画したVTRを用いた（方法についての詳細と番組基礎データについては萩原論文を参照）。

実際にはジェンダー・アイデンティティは複雑であり、単純な二分法を適用することはできない。しかし通常われわれは日常的相互作用の場面で本人のジェンダー・アイデンティティを確認しないまま、二分法的性別を前提にしたカテゴリー化を行っている。また、テレビ番組制作者、視聴者、視聴者の一人としての研究者はそれぞれ性別ステレオタイプをある程度共有している⁽⁵⁾。その際用いられている知こそが、「いま、ここで」のジェンダーである。そこで分析にあたっては、「日常知」としての性別カテゴリーを用いることにした⁽⁶⁾。

脚注

3. 番組出演者の発言で構成された『目覚める日本人!!! ここがヘンだよ日本人』によるとケビン・クローンは実際には日本とアメリカの二重国籍である。
4. 番組開始当初には、エンディングに外国の街角で見つけた女性に簡単なインタビューをしたあと、水着姿を写すというVTRコーナーがあった。番組が暗黙のうちに男性視聴者をターゲットと想定し、若い女性の水着姿で目をひこうとしていたことを物語る。ただし、このコーナーは5回で姿を消した。
5. 登場した「外国人」の中には、生まれたときの性別は男性であったがホルモン療法や手術によって身体を変えていることを発言で明らかにした人もいた（佐々木ジャッキー。オーストラリ

ア）。服装は胸のあいたドレスであった。この出演者のジェンダー・アイデンティティを推測したコーダーは、本人の発言内容や出演者の反応から「女性を指向する男性」という位置づけであると判断し、暫定的に男性としてカテゴライズしている。『目覚める日本人!!! ここがヘンだよ日本人』によると、佐々木はトランスジェンダーである。ただし佐々木の発言は少なく、分析結果への影響は小さい。

6. 議論のために一時的に「女」「男」といったカテゴリーを固定させて話を進める必要がある場合の戦略的なカテゴリー化を小野俊太郎は「戦略的本質主義」と位置付けている（小野，2001: 170）。

▶ 3 日本の男女平等政策とメディア

1) 『ここがヘンだよ日本人』の放送時期における男女平等政策の転換

番組が放送された1998年から2002年は、日本における男女平等政策に大きな進展がみられた時期である。日本政府は、第4回世界女性会議（1995年）で採択された「北京宣言及び行動綱領」に基づいて、実質的な取り組みを進めたからである。

この間に「男女共同参画社会基本法」（以下では「基本法」と記す）が制定された（1999年6月）⁷⁾。男女平等を規定する憲法をもつようになって半世紀を経過し、この間男女雇用機会均等法を制定し、女性差別撤廃条約を批准（1985）するなど、一連の男女平等施策を進めてきたにも関わらず、一向に性別格差が埋まらないことが、「基本法」制定の背景にある⁸⁾。国会審議の過程で「基本法」には野党の要請により前文が加えられた。前文では「男女共同参画社会の実現を21世紀の我が国社会を決定する最重要課題と位置づけ、社会のあらゆる分野において、男女共同参画社会の形成の促進に関する施策の推進を図っていくことが重要である」とされた。

ところで、「基本法」に結実した、この間におきた日本の女性政策の転換とは、大沢真理によると、(1)女性の地位や福祉の向上を目標として女性を対象とする施策から、男女を対象として「男女共同参画」を目的とする施策へ(2)政策の取り組み対象の拡大（「性別による偏りのない社会システムの構築」に向けた政策パラダイムの転換）、の2点である（大沢、2000: 2-12, 2002: 46-48）⁹⁾。従来の「女性政策」（男性と比較して社会的地位が低い女性を保護し、「男性なみに」引き上げるための政策。女性が不利な社会で生じている「女性問題」の解決を目指す）から、男女がともに個人個人の個性や能力がより尊重される社会に組み換えることに主眼をおくより幅広い施策への重要なパラダイムチェンジということが出来る。

2) ジェンダーをめぐる解釈の対立とマスメディア

「男女共同参画社会」とは具体的にはどのような社会だろうか。1994年の総理府本府組織令によって規定された「男女共同参画社会」とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野において活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」である。「男女共同参画」の公式の英訳は、gender equalityとなっていることから推測すれば、既存のジェンダー秩序（性別に関わる社会の構造特性。性別分業やセクシュアリティの内容を構築することも含む）をより平等にし、性別による格差を極小にした社会と捉えるのが妥当だろう。そうした社会はまだ実現していない。

また、1)で述べたような政策上の転換を具体的な施策として実施していくうえで、



7. これは基本法令として、男女の人権の尊重など男女共同参画に関する基本理念や国家の責務と権限などを規定するものである「基本法」は、男女共同参画社会の形成の促進に関する基本的な施策として、国が基本計画を策定し、その進行について年次報告を作成することなども求めている。

8. 日本における男女平等実現の遅れを国際比較によって示す指標として、UNDP（国連開発計画）が毎年発表している「人間開発指数（HDI）」と「ジェンダー・エンパワーメント測定（GEM）」の数値がよく用いられる。2001年のUNDP報告書によ

ると、基本的な人間の能力がどこまで伸びたかを測るHDIでは日本は162カ国中9位である。しかし女性が経済界や政治領域で意思決定レベルに進出しているかを示すGEMでは測定可能な64カ国中31位にしかっていない。HDIもGEMも共に上位を占める先進国が多いなかで、日本社会における女性の参画の遅れが目立つことは繰り返し指摘されている（内閣府、2002: 31-34）。

9. この方向は1996年（平成8年）に、「男女共同参画審議会」が橋本首相（当時）に答申した「男女共同参画ビジョン・21世紀の新たな価値の創造」ですでに明確に提示されていた。

「男女共同参画（社会）」や「社会的・文化的性別（ジェンダー）」といった概念が、マスメディアなどを通じて、分かりやすく一般市民に了解されることが必要である。しかし、この間識者や専門家によって論じられた内容とそれに基づく政策転換の意味が、行政職員も含め、どれだけ一般的な人びとに理解されているかについては疑問も残る¹⁰⁾。このような状況は、二分法としての性別とそれに関連づけてものごとをとらえる社会観・人間観を変えることの難しさを表している。それぞれが自己および社会的に共有されているジェンダー・ステレオタイプを反省的に自覚することなしに、ジェンダー・ステレオタイプが支えるジェンダー秩序を揺るがせ、男女共同参画社会を実現することは困難である。

「男女共同参画」の取り組み自体は、1970年代以降の日本政府の一貫した女性の地位向上のための施策の延長線上にあり、「基本法」も閣議決定を経て政府提案でなされたものである（山下，2000：27-58，古橋，2000：84-91）。男女平等が憲法に記され、その実現についての法的合意がある日本社会で、社会的地位や資源配分に性別による格差が認められる以上、男女平等の実現を目指す政策を進めるのは当然であり、国会での法案審議過程でも「基本法」作成自体への反対はなかったという（古橋，2000：89）。

だが、二分法的な男女の性別特性を生得的なものとし、「男らしさ」「女らしさ」（規範的なジェンダー・ステレオタイプ）を社会生活を安定させるうえでの不可欠な要素だと考える立場をとる人は、そもそも社会的・文化的性別という意味でのジェンダー概念を容認せず、「生得的な性別」に基づく男女の社会的配置（固定的性別分業に基づく家族のあり方、男女の階層性、異性愛中心主義のセクシュアリティ）の存続を主張する。ところが他方で同時に「男女平等」については重要な価値として認めている。したがってそうした人々は「基本法」が実現を目指す男女平等社会が性別を所与とした男女平等（男女の特性論に立脚した男女平等）であることを求め、性別の壁を解消する方向での平等（二分法的性別による制約をなくしていく）には当然ながら反対する。

こうした主張は、国連「女性差別撤廃条約」（以下「条約」と記す）とは基本的に矛盾し、対立しかねない立場である。なぜなら「条約」は第5条で「両性いずれかの劣性若しくは優越性の観念又は男女の定型化された役割に基づく偏見及び慣習その他あらゆる慣行の撤廃を実現するため、男女の社会的及び文化的な行動様式を修正すること」として、「文化」の変更を迫っているからである。日本はこの条約を1985年に批准した。従って性差別的文化を聖域とはせず、必要な修正をしていく責任を負っている¹¹⁾。

性別に関する本質主義と構築主義の対立は日本国内だけでなく、国連でも繰り返し争点となっている¹²⁾。前者の立場は、その国に固有の文化や伝統の尊重を主張している。こうした文化的・政治的対立が、交渉を経て一連の国際的な取り組みにおける合意として獲得されてきたのである。

「平等」が近代的価値として共有されているために、男女平等の実現が必要か否かという点は争点にはならず、どのような状態をさして男女平等とみなすかについての解釈をめぐって対立がおきる。その点は1975年の場合も同様であった。前述の「国際婦人年

編注

10. 2000年に実施された意識調査によると、ジェンダーについて「関心がある」と答えたのは川崎市の役職者の2割を下まわる（かわさきジェンダー指標研究会，2001）。

11. 「男女共同参画」を英語表記ではgender equalityとしていることから分かるように、日本政府の取り組みはすでにジェンダー概念を前提としたものになっている。条約批准後に官房長官や知事に就任した女性が、表彰のためであっても相撲の土俵に

女性を上げないという日本相撲協会の方針（「伝統文化」を根拠にした）に批判的立場をとるのは、日本政府の方針と合致したものと見える。

12. イスラム諸国やバチカン、ジェンダーという概念やセクシュアル・ライツ（ホモセクシュアルなど多様なセクシュアリティの権利を尊重する）、リプロダクティブ・ライツ（性および生殖に関して自己決定する権利）に強く抵抗を示してきた。

をきっかけに行動を起こす女たちの会」によるCMのジェンダー・ステレオタイプへの異議申し立てに対し、週刊誌は「差別と叫ぶ前に、男女の区別をもっと認識すべき」「男には男の役割があり、女には女の役割がある」といった識者のコメントを多くとりあげた（行動する会記録集編集委員会，1999: 34-51）。性の二重規範と役割分業規範に基づくジェンダー・ステレオタイプを維持したまま女性の人権を尊重し、男女平等を実現できるという「日本の常識」は、その後も日本社会におけるあらゆる場でみられる現象である。

女性の権利の尊重や男女平等の正当性はマスメディアによっても公認されている。しかし、それは表向きで、報道や教養ジャンルの番組の域を出ていない。ワイドショーを含む娯楽番組ではジェンダー概念に基づいて男女平等を強く主張する女性は「フェミニスト」としてステレオタイプ化される。ポピュラーメディアは、フェミニストに大衆的人気が期待できないことを前提に、むしろそれを否定したり、揶揄することで幅広い読者や視聴者の支持を得ようとする。

一方、女性の社会進出や男女の関係性における変化、性的解放は進んでおり、その現象自体は興味をひく題材だと広く認知されている。そこでポピュラーメディアは、男女の関係性の変化や女性の権利主張をどのように大衆的に解釈することができるか、その解釈枠組みを提供する必要にもせまられる。

3年半にわたって制作・放送された人気番組である『ここがヘンだよ日本人』には、こうした状況がどう反映されただろうか。「外国人」が忌憚のない日本・日本人批判をするこの番組で、ジェンダーがどのように扱われたであろうか。「外国人」は日本における形式化した性差別の論じ方やジェンダーをめぐる議論のステレオタイプ化された枠組みをどのように変化させ、あるいは変化させ得なかつたのだろうか。

▶ 4 バラエティ『ここがヘンだよ日本人』のジェンダー分析

番組は日本文化批判とそれへの反論から、次第に時事問題や社会問題をとりあげるように変化した。タイトルを追うと、国家間の問題や外国における事件、国内問題などが時期を置かずにテーマ化されていることがわかる。イラクとアメリカ、パキスタンとインドなど対立する国の人同士が議論する場面を設定し、また発展途上国の子どもの生活を紹介し、「ゆたかさ」の中に安住している日本の子どもの生活を見直すなどドキュメンタリータッチの回もあった。日本社会の外国人差別、とりわけアジア・アフリカなど非白人への偏見・差別や同性愛者への差別も繰り返し取り上げられた。また「ストーカー規制法」の成立（2000年5月18日）と同時期にストーカーをテーマにする（5月10日、17日、7月26日）など法律制定も意識されていた。日本社会の新動向や国際情勢を取り込み、日本人だけで討論するときには期待できない多様で活発な議論を盛り上げたところに、この番組の真骨頂があったといえよう。

「ストーカー」だけでなく、「妊娠中絶」「セクハラ」「ドメスティック・バイオレンス」「女子大生の就職難」「夫婦別姓」「大阪府女性知事と土俵の問題」「男女雇用機会均等法」などジェンダー関連のトピックスは、扱いの軽重はあれ、番組内で数多く取り上げられている。制作側が、これらジェンダーに関連する事象をかなり意識した番組づくりをしていることがわかる。

一方、番組では、テーマタイトルや小テーマ（トピックスを提示するテロップに表示され、番組内でのコーナーの開始を告げる）に「男女共同参画」や「ジェンダー」という用語は一度も登場することなく、議論においても、また「常識テスト」やクイズの出題としても取り上げられていない。ジェンダー関連の話題のなかでも、視聴者にアピ

ールする題材とそうでない題材は慎重に選別されているといえる。

1) 発言者と発言時間のジェンダー構成

まず「外国人」発言者について量的なジェンダーバランスをみよう。146回の番組中で発言した人数を数えると、男性199名(65%)、女性108名(35%)である。男性の発言者は女性の2倍近くにのぼり、発言延べ回数は男性73%、女性27%となっており、男性は発言人数が多いだけでなく、1人当たり発言回数も多い(発言数について詳しくは、萩原論文参照)。ただし、女性が発言しなかったのではなく、もともとスタジオにいる女性の数は少なかった。スタジオ収録を見学した2001年7月25日には、男性69名(69%)、女性31名(31%)と、男性が女性の2倍以上であった。放送された番組から、全体人数や男女比を把握するのは難しいが、スタジオの男女比はほぼこの割合だったと推測される。発言人数の男女差は構造化されていたわけだ。数では少ない女性が、1人当たりの発言数も男性より少ないことで、より目立たない状況に置かれた。

当日入手した台本によると、出演者の配置はランダムではなく、性別を意識して行われている。出演者の座席配置表には、氏名と国名、性別が記入されており、同日に収録が行われる場合も、配置を大幅に替えている¹³⁾。テーマと出演者の性別は関連づけられているといえよう。

また、発言回数が多いゾマホン・ルフィン(ベナン)はいずれの回も中央に近く、カメラが捉えやすい位置にいる。女性でも発言回数の多い人は「外国人席」中央に配置されている。このことから、発言内容そのものについて制作側からの直接的指示はなくても、番組演出上、発言を期待されている人とそうでない人がおり、それが本人にも自覚できる仕組みになっていることが分かる。

よく指名され、編集段階でカットされないのはどのような発言であるかといった発言の有効性について、出演者は次第に学習し、自己演出をしたことも推測される。発言内容が主張に基づくものか、効果的な自己ステレオタイプ化のための演技なのか区別しにくい面もある。

発言回数の多かった男女について、各人の特徴をみておこう。最も発言数が多かったゾマホン・ルフィンの場合、他の出演者に比べて達者とはいえない日本語、派手な民族衣装、感情表出の激しさといった特徴のほか、発言内容が定型的事であることが、「笑い」をよぶ要素として利用された。たけしは、ゾマホンの発言内容を予測し、その発言が最も効果をあげるタイミングを測って指名したと思われる。セクシュアリティについての保守性、反欧米文化、日本の伝統文化への賛美という内容である。同性愛を忌避し、女性に関しては母性愛や処女性を尊重し良妻賢母規範の重要性を指摘し続けた。

自己演出的傾向はケビン・クローン(アメリカ。アメリカ軍をイメージさせる服装と徹底したアメリカ支持、攻撃的な発言スタイル)に強くみられる。またノイマン・クリストフ(ドイツ。前2者と対照的にゆっくりした穏やかな発言スタイル、セクシュアリティに関する寛容さ、知的なイメージ)にもみられる。視聴者はこれらの人びとのパターン化した発言内容や発言スタイルを予測して、この番組の討論を議論番組としてだけでなく、バラエティとして楽しむようになったと思われる。

女性の場合はどうか。女性で最も発言回数が多かったウチダ・ヨウコ(ガーナ)は、

脚注

13. 2番組を同日収録したことを視聴者に気づかれないための配慮もあるだろうが、番組テーマによって、発言者の反応傾向をある程度予測し、演出効果をあげる狙いもある。見学当日は「こ

こがナゾだよ!アントニオ猪木」と「あなたは信じますか?日本の霊能力3」の収録日であったが、舞台中央に配置されていたのは前者では男性が多く、後者では女性が多かった。

ガーナ人と日本人のハーフとしてのアイデンティティを強調し、女性の中で最も激しい感情表現をした。国際結婚の話題で涙を流して抗議し、いじめ問題では自己の経験を語り、セクシュアリティの話題でも積極的発言をするなど、話のツボを得ていたことも、発言が取り上げられる機会を増やしたと思われる。ニコラ・ロレッタ・ナカシマ（スリランカ）は、10代の学生である。ウチダ・ヨウコのような感情表現はなく、番組内で日本の若い女性が「問題のある存在」としてステレオタイプ化される際に、対照的なアジア女性として日本女性の「愚かさ」を印象づけた。アレキサンドラ・ヘーフエリン（ドイツ）は感情的にはならず、むしろ理詰めで話す印象が強い。番組ではフェミニストとして位置づけられ、そうした発言を期待された。ウチダは俗語や露骨な性表現などで「笑い」をとる存在にもなっているが、他の2人はそうではない。女性の場合、男性に比べると発言が少ないものの、それぞれアフリカ、アジア、ヨーロッパ地域を代表する形で3人が女性の発言率上位に並んでいることは興味深い。

2) 性・ジェンダーをとりあげた番組と放送時期

146番組のうち、タイトルに性・男女およびその関係性を意味する言葉を含み、かつそれが中心テーマであるものを類別すると全体のほぼ4分の1にあたる37本になる(25.3%)。そのうち、男性をテーマタイトルに含み、男性がテーマになっているものが4本、女性をタイトルに含み、女性がテーマになっているものが16本である(表1参照)。

番組タイトルには、男女関係におこるトラブルと、トラブルとしての女性を設定したものが多く、トラブルとしての男性という設定は少ないという特徴がある。

性・ジェンダーをテーマにした番組の概要と放送時期ごとの配置の特徴をみることにしよう。

<1998年度下半期>

放送開始の最初の半年間は、異文化からみた日本文化・日本社会をテーマにし、「日本人のここがヘン」をスタジオの外国人から指摘させるものが多い(13本)。ところが後半になると、日本人からの反論を「逆襲」として扱うものが増える(5本)。全20本のうち、男女の関係性を扱ったのは「日本の恋愛」、日本人の逆襲ものとして「外国人にナンパされた女性編」「国際結婚トラブル編」がある。直接的に性を扱ったのは「幼児からの性教育、YESですか、NOですか」の1本、男性がテーマになったのは「外国人の皆さん、あなたの国でもこんなことあるんですか?日本の男性編」1本である。

「ヘンだ」と指摘される日本人女性のサブカテゴリーとして、まず「女子高生」がとりあげられた。複数の男性とセックスをしている女子高生が登場し、批判する外国人とトークバトルを繰り広げた。

<1999年度上半期>

「逆襲」ものの中に、日本人のサブカテゴリーとして「スチュワーデス」「日本のサラリーマン」「ツアーコンダクター」が登場する。98年度下半期の番組を受けて「ここがヘンだよ日本の女子高生第2弾 親の顔が見たいならお見せしましょうスペシャル」が放送された。この回に親として登場したのは母親だけであり、父親は出てこない。問題のある女子高生の母親にも問題があるはずだという通念を前提にしている。

男女の関係性を扱うテーマとして「ここがヘンだよ日本の不倫」がある。「同性愛者対外国人」では、同性愛を認める者と認めない者とが激しく対立した。

<1999年度下半期>

「同性愛者のリベンジ」は上半期の続編である。これまで非白人として日本社会での被差別経験を訴えていたイスラム系のアジア・アフリカの男性が、同性愛者に対して差

表1 性・ジェンダーをテーマにした番組	
1998年度下半期	
1998/12/2	「ここがヘンだよ日本の恋愛」
1999/2/3	日本人の大逆襲第2弾 「外国人にナンパされた女性編」
1999/2/10	スペシャル企画第3弾 「幼児からの性教育, Yesですか? Noですか?」
1999/2/17	日本人の大逆襲第3弾 「国際結婚トラブル編」
1999/2/24	「外国人の皆さん, あなたの国でもこんなことあるんですか? 日本の男編」
1999/3/17	「ここがヘンだよ日本の女子高生」
1999年度上半期	
1999/4/21	日本人の大逆襲第5弾 「スチュワーデス編」
1999/4/28	「ここがヘンだよ日本の女子高生第2弾 親の顔が見たいならお見せしましょうスペシャル」
1999/5/26	日本人の大逆襲第7弾 「ここがヘンだよ日本のサラリーマン」
1999/7/7	「ここがヘンだよ日本の不倫」
1999年度下半期	
1999/9/1	「同性愛者50人vs外国人50人」
1999/10/13	「同性愛者のリベンジ第2弾 私たちの心の叫びを聞いてください」
1999/10/20	「ハマる女シリーズ第1弾」
1999/10/27	「ハマる女シリーズ第2弾」
1999/11/10	「ここがヘンだよ日本のポルノ」
1999/12/1	「私は国際結婚でこんなヒドイ目にあってしまいましたスペシャル」
2000/1/12	「日本女性の性について考える」
2000/2/16	「国際結婚は良いのか, 悪いのか」
2000/2/23	「日本のひずみを考える, 夜の街で働く女子大生」
2000年度上半期	
2000/5/10	「ストーカー犯罪を考える」
2000/5/17	「ストーカー犯罪を考える 第2弾」
2000/7/26	「ストーカー犯罪を考える 第3弾」
2000年度下半期	
2000/10/18	「働かない男たち ヒモについて考える」
2000/10/25	「女性の権利を考える第1弾 妊娠中絶」
2001/1/17	「男と女のトラブルについて考える」
2001年度上半期	
2001/4/12	「オンナの顔」
2001/4/26	「ここがヘンだよ 結婚したい女たち」
2001/5/10	「ダメな女スペシャル」
2001/5/24	「オンナの顔 第2弾」
2001/5/31	「日本の人妻」
2001/6/14	「21世紀ニッポン夫婦の大問題」
2001/6/21	「ハゲの男達の叫び声を聞け」
2001/7/5	「オンナの顔 第3弾」
2001/8/2	「太っている人々の熱き主張 第3弾 真夏の大恋愛スペシャル」
2001/8/30	「女は男のうえに立てるのかSPECIAL」
2001年度下半期	
2001.10.18	「オンナの顔 第4弾 自称ブスVS整形美人」
2002.2.28	「日本の立派な女子大生たち」



別意識をあらわにした。「同性愛」だけでなく「日本のポルノ」「日本女性の性」も性を扱い、「女子大生」も性産業で働く女子大生と外国人を対決させた。また「ハマる女」がシリーズとして2本放送された。女性がはまっている現象としてとりあげたのは「パチ

ンコ」「ホスト」「ダイエット」「ブランド」である。第1弾の番組冒頭のVTRでナレーターは「男女雇用機会均等法」に触れたコメントをした。

<2000年度上半期>

番組内容から異文化理解という側面は消失し、「少年犯罪」「いじめ」など犯罪や逸脱行動が繰り返しとりあげられた。「女性」や「女」をタイトルに含む回はなく、男女の関係性にかかわる犯罪として「ストーカー」が3回とりあげられた。ストーカー殺人がおき、ストーカー防止法が国会で審議されていることを意識した番組である。ストーキングの加害者経験のある人物を登場させ、被害にあった経験をもつ女性と対決させた。

<2000年度下半期>

「シドニー・オリンピック」「日本の病院」「日本のプロ野球」「日本の公共事業」など、逸脱行動ではなく、より公共的な話題を取り上げている。女性をテーマにした番組でも「女性の権利について考える第1弾 妊娠中絶」と、硬いタイトルになった。男性テーマでは「働かない男たち ヒモについて考える」、男女の関係性を扱うものとして、愛人・セクハラ・痴漢を扱った「男と女のトラブルについて考える」がある。

<2001年度上半期>

2000年度下半期に比べ全体的にテーマ設定の幅が狭くなり、討論よりも霊能力実演など出演者のパフォーマンスの比重が増した。そうした中で、「オンナの顔」(第3弾までシリーズ化)、「結婚したい女たち」「ダメな女スペシャル」「日本の人妻」と女性を指す語を含むタイトルの番組が急増している。「女は男の上に立てるのがSPECIAL」は、前半で田中真紀子外相(当時)、後半では女性社長を扱った。2000年度下半期に開始された、太った人をとりあげるシリーズは恋愛に焦点をあてた。男性では「ハゲの男たち」という男性のサブカテゴリーが登場した。

<2001年度下半期>

9月11日のニューヨーク貿易センターへのジェット機突入事件、アフガニスタン爆撃、ワールドカップなど時事問題を意識したテーマ設定と、身体障害者というあらたな日本人のサブカテゴリーの登場が増え、男女の関係性はテーマにならなかった。女性の美醜を話題にする「オンナの顔」シリーズの第4弾と「日本の立派な女子大生たち」の2本が女性をテーマにした。

以上のように、番組で性・ジェンダーが主題化される割合は、放送時期によりかなり差がある。特に多いのが2001年度上半期、少ないのが同年度下半期であった。

3) 女性をテーマにした番組についての検討

性・ジェンダーをテーマにした番組のうち、女性をテーマにした16本ではどのようなテーマ展開がなされたのか、番組内の討議コーナーの開始を示すテロップで提示された主張(小テーマ)を整理したのが表2である。

1998年度下半期と99年度上半期に女性がテーマになった2本では、「外国人」による日本人批判が提示されているが、それ以降は、2001年度上半期「女は男の上に立てるのがSPECIAL」での「田中真紀子さんは、女性だからイジメにあっているんです」を除く全てが日本人女性からの提示である。つまり、増加した「女性テーマ」は、「外国人」からの日本人批判として設定されているのではない。番組が「トラブルとしての女性」を探し出し、当事者である日本人学生をスタジオに招いた上で当事者に自己正当化の主張をさせ、その主張に対する「外国人」の反応をとらえるパターンになっている。つまりその結果として「外国人」は番組の主役から添え物に転じたのである。

表2 女性をテーマにした番組の展開

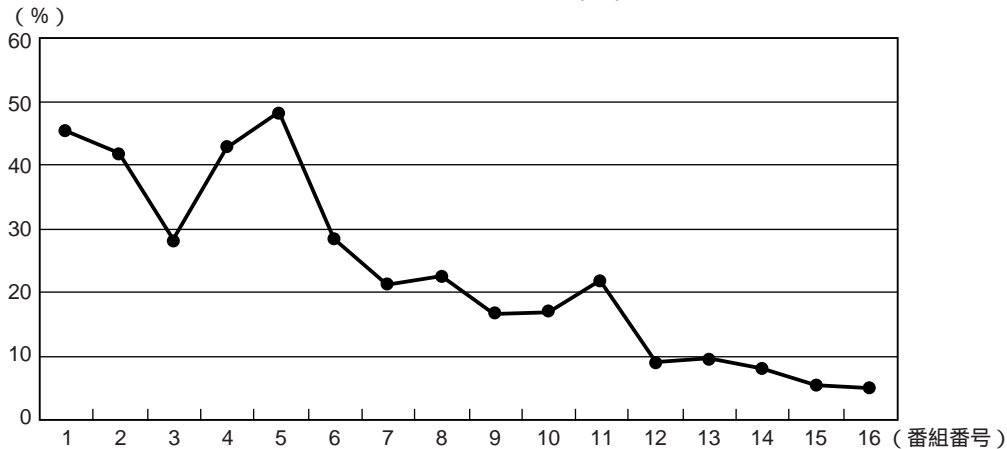
1998年度下半期		
1	3月17日	ここがヘンだよ日本の女子高生 「女子高生がSEXするのはヘンですか?」「女子高生より我々の方がきちんとした日本語を話せる」 「キティちゃんとチャンネルを同時に持つ女子高生はバカ!」「女子高生は今の生き方を自分の子供に自慢できるのか!」
1999年度上半期		
2	4月28日	ここがヘンだよ日本の女子高生第2弾 親の顔が見たいならお見せしましょうスペシャル 「女子高生が平気でSEXするのは親が悪い!」「座り方、しゃべり方、食べ方、母親がちゃんとしつけをしていない」「20歳までは親が娘の持ち物をチェックするべきだ」
1999年度下半期		
3	10月20日	ハマる女シリーズ第1弾 パチンコにハマる女 「子供とパチンコ、どっちをとるかと言われたら、絶対パチンコです」 ホストにハマる女 「ホストは世界一優しい、フツーの男なんて全くダメ」
4	10月27日	ハマる女シリーズ第2弾 ダイエットにハマっている女 「周りの男にキレイと言われたい、そしてナンパされたい!」 ブランドにハマる女 「ブランドは一生懸命働いた自分へのご褒美だ!ブランド着せるのは子供の教育」
5	1月12日	日本女性の性について考える 「友達がヤツタのに私だけが処女でいるわけには絶対いかない!」 なぜ彼氏がいても浮気するのか? 「彼はフランス料理のフルコース、時にはお茶漬も食べたい」 「最高の旦那を見つけるために、今はいっぱい資料を集めているところ!」 なぜ避妊しないのか? 「セックスは快樂のためにするもの、だから当然ナマ!」
6	2月23日	日本のひずみを考える、夜の街で働く女子大生 「普通のアルバイトよりずっと社会勉強になります」「借金を返し終わったらこんなアルバイトすぐに辞めます」「私は選ばれた女、留学資金のためと割り切っています」
2000年度下半期		
7	10月25日	女性の権利を考える第1弾 妊娠中絶 「私は200人と経験したが、妊娠するとは思わなかった」「相手の男は私のお腹を殴った上に「本当に俺の子か?」と逃げました」「お母さんに勧められて中絶しました、お母さんも中絶しています」 「レイプされて妊娠してしまいました、中絶すべきか迷っています」
2001年度上半期		
8	4月12日	オンナの顔 顔にコンプレックスをもつ女性たち 「男の人はやっぱり顔で女を選ぶんですか?」「私は努力を重ねて幸せを勝ち取ります!」「女は顔じゃありません、私はお金のために努力します」 美しさで仕事をしている女性たち 「もし美人に生まれていなかったら、絶対に整形します」
9	4月26日	ここがヘンだよ結婚したい女たち 「もう働きたくないから結婚したいんです」「信頼も愛もお金がないと成立しません」「子供のことを考えるとカッコいい男でなければダメです」「冠婚葬祭の知識なんて知らなくても本屋さんに駆け込めば大丈夫」「料理なんかできなくても他の人にやってもらえれば大丈夫」
10	5月10日	ダメな女スペシャル 片付けられない女 「掃除ができなくてもちゃんと生きていけます」「掃除をしなくても必要な物はすぐ見つかります」「掃除はやりたい人がやればいいんです!」 借金を止められない女 「あなたはまさに現代のサムライだ」 性におぼれる女 「私はセックスで男を征服したいんです」「三度の食事より大切です、セックスは精神安定のために欠かせません!」
11	5月24日	オンナの顔 第2弾 自称ブスVS自称美人 「このまま処女じゃ死んでも死にきれませんが、絶対に整形はしません」「私は、歯を治しただけで人生が変わりました」「良いセックスをすれば誰だってきれいになる!」 努力をする女の逆襲 「私たちの体を張った努力、いったい何が悪いんですか!」
12	5月31日	日本の人妻 家庭における男女平等 「私は誰にも言えない“夫の秘密”を知ってしまいました」 離婚を考えるきっかけ 「私はいざという時に備えて“夫の秘密”を保存しています」 嫁姑の考えの違い 「私は夫の“家”と結婚したんじゃないじゃない」 浮気をする理由 「昼間に浮気をした日には必ず夫にも抱かれます」
13	7月5日	オンナの顔 第3弾 「ブスの皆さん、自分が光る原石だと信じて、少し磨いてはいかがですか?」「ブスや音痴は伝染するので、くれぐれも注意してください」「私は自分の顔が嫌いなので、絶対に整形します」
14	8月30日	女は男の上に乗るのかSPECIAL 「田中真紀子さんは、女性だからイジメにあっているんです」「役人を仕切れない田中真紀子さんは政治のプロではありません」 女社長VS男性社員50人 「私は、男を利用して絶対大きくなります」「女は男のシモベ、上に立つなどトンデモナイ」
2001年度下半期		
15	10月18日	女の顔 第4弾 自称ブスVS整形美人 「ブスから生まれ変わった私」「整形する女」「私は素材の良さで生きています」
16	2月28日	日本の立派な女子大生たち 「ニュースやっている時間に家にいないし、周りに間違いを教えてくれる人もいません」「女は少しバカな方が助けてもらえるし、友達もできるんです」「私は教えてもらわないと何もできません」

注：番組番号が図1・2・3の番号に対応する

発言時間からも、「外国人」の位置づけの変化がはっきりとわかる。番組全体の傾向としてもスタジオ討議の時間が減少し、スタジオ討議に占める「外国人」発言時間の比率も低下した（萩原論文参照）。

女性テーマ16本について、番組全体に占める外国人発言時間をみたのが図1である。外国人軽視の傾向は、2000年度下半期以降顕著である。討論コーナーの全体時間とそこでのコメンテーター、「外国人」、「当事者」すべてを含んだ男女の発言時間をグラフ化したのが図2である。これをみると、2000年度下半期以降、女性テーマでの討論時間は全体に増減があるものの、放送全体での女性の発言時間はむしろ増えている様子が見える。しかし増えたのは「外国人」女性ではなく、当事者女性の発言であることが図3をみると明白である。「女性テーマ」での「外国人」女性の発言は男性より一貫して少なく、とくに2001年度以降は合計で200秒以下しかない。発言人数も減り続け、「女の顔 第4弾」では外国人女性は1人も発言していない。

図1 番組中の外国人発言比率（％）



注：図1，図2，図3の番号は表2の番組番号に対応する

図2 討論場面での男女の発言時間

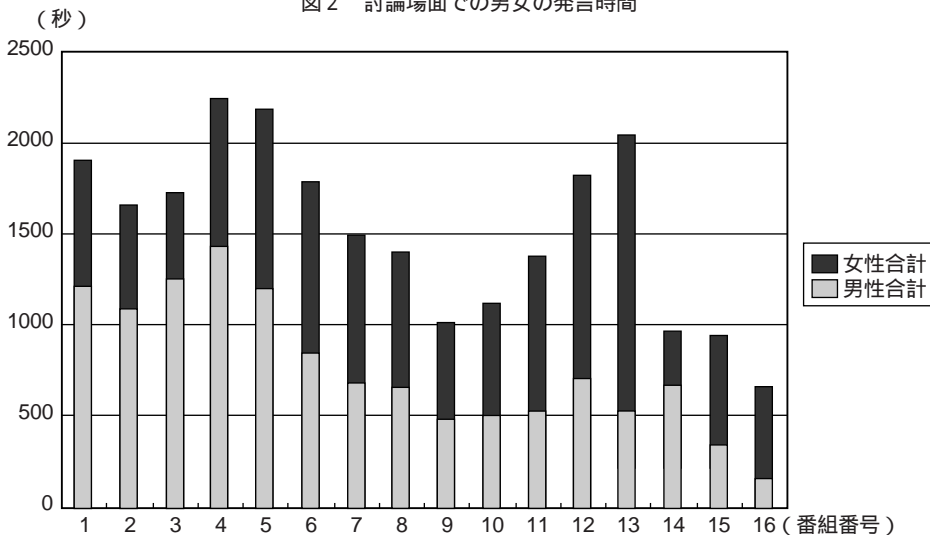


図3 討論場面での発言時間

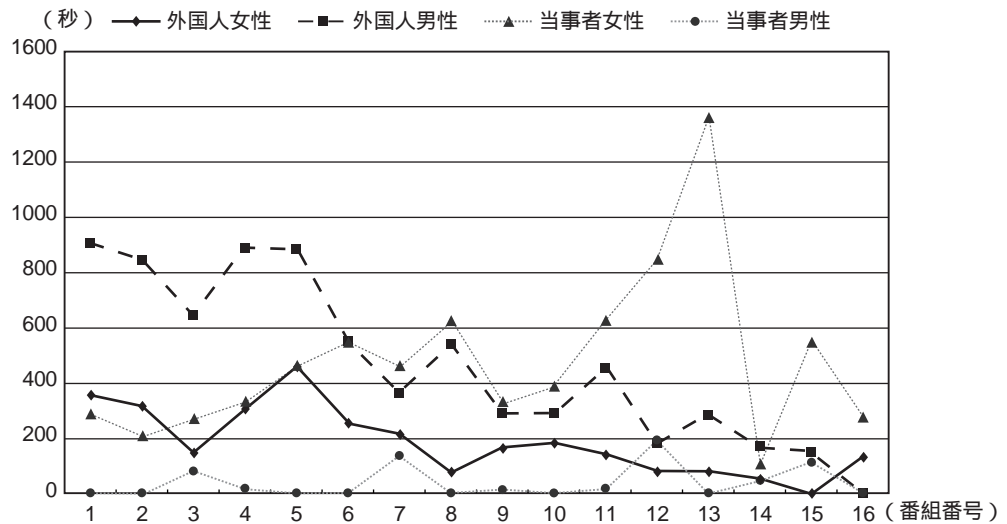


Figure & Table

▶ 5 番組におけるジェンダー・ステレオタイプの変化

番組冒頭のナレーションでは、男女雇用機会均等法など、性差別解消の取り組みと関連づけた問題提示が繰り返しなされた。この番組は「男女共同参画」の動向を無視してはいないのである。しかし、性差別についての扱いは外国人差別や同性愛差別、いじめなどのテーマに比べると、古典的かつ消極的であった。

番組開始後時間がたつにつれて、番組内容は時事性や社会問題にたいして問題提起をする姿勢を弱め、性別カテゴリーとそれにはりつけられたステレオタイプの上に乗って女性のネガティブイメージを強調し、女性同士を対決させて、その対決を視聴者に楽しませようとする構図が強化された。番組内容からこの番組の3年半を人生のライフコースになぞらえると、2001年以降は番組終了(番組の死)までの「晩年」だったといえよう。ステレオタイプ化された「トラブルとしての女性」は、勢いを失った番組に力を取り戻すために視聴率をとるための活力剤として道具化されていった。

1) 「女性の権利」と「女性上位」を扱った番組

日本社会における性差別的なジェンダー秩序をテーマ化した例外的な番組としては「女性の権利を考える第1弾 妊娠中絶」(2000年10月25日)と「女は男の上に立てるのかSPECIAL」(2001年8月30日)があった。

前者は、何回もセックスして中絶した17歳の女性を登場させ、これに対し、中絶容認派と中絶反対派の対立(「外国人」の女性対男性)になった。次に妊娠した女性と妊娠させた男性が登場すると、「責任をとらない男」に批判が集中し、対立は解消した。続いては中絶経験のある母娘を出演させることで、「母親の責任」をめぐる議論に展開し、日本では中絶への抵抗が少ない問題を提起した。最後に登場したのはレイプ被害者であるにも関わらず中絶を迷う女性である。ここではじめて「女性の人権」としての中絶というテーマを考えさせた。中絶される胎児の映像を流し、ショックを受ける様子の出演者をみせた上で、番組終了直前のVTRで、被害女性が、収録後に中絶手術を受けたことを報

告した。産婦人科の医師が中絶と避妊知識の欠如の実態を解説するなど、問題提起の姿勢は一貫しており、中絶容認派と否定派が対立する議論を盛り上げた上で、女性の権利としての中絶の重要性を考えさせる構成だった。シリーズ化されなかったのは、社会問題をテーマにすること自体がこの後なくなったこととも関連しているだろう。

「女は男の上に立てるのかSPECIAL」は、男女の権力関係をテーマにした唯一の番組だった。田中真紀子外相（当時）を取り上げ、アレクサンドラ・ヘーフェリン（ドイツ、語学教師、女性）が外相バッシングは女性ゆえのいじめであると問題提起した。受けて立ったのは、ただ一人のゲストの早坂茂三であった。しかし早坂はヘーフェリンの主張の内容や態度に激昂し、「もっとつつましく」などと発言し、プーイングやケビン・クローンらの強い批判を受けた。こうした批判に対して早坂がスタジオから退出すると発言したため、議論は活発化せずしらけたものになった。放送された番組の後半は、女性社長の仕事ぶりをVTRで紹介し、男性社員50名の中から反発を指摘させたとうえで、「女性は男性を立てることが大切」という大阪の女性社長の言葉を結論代わりにし、「女は男の上に立てない」結論を導く構成であった¹⁴。

「田中真紀子」批判を、力をもつ女性へのバッシングととらえるフェミニストと、彼女には実力がないとみる田中角栄の元秘書の対立が、男女の対立にならず、元秘書の威圧的態度に弱腰になる「日本人」と、臆せず通常通りの態度で議論しようとする「外国人」との差異として現れ、「外国人」女性の発言を抑制するやり方を通じて、「女を男の上には立たせない」日本社会のジェンダー秩序を浮かび上がらせたといえよう。

2) 女子大生をテーマにした2番組にみる『ここがヘンだよ日本人』のジェンダー表現

「女子大生」は、2000年2月23日「日本のひずみを考える、夜の街で働く女子大生」と2002年2月28日「日本の立派な女子大生たち」の2番組でテーマ化された。同じカテゴリーを取り上げる場合は、「第2弾」などと銘打ち、共通の視点で番組が作られることが多かったが、「女子大生」は2年の間隔を置いて別の角度からとりあげられたのである。2本の番組を比較すると、番組構成が大きく異なっており、しかも2000年より2002年の番組の方が差別的な女性のステレオタイプを描いていることがわかる。番組では、一連の男女平等政策の進行とは逆行する女性のステレオタイプ化がなされたといえよう。

そこで以下では、この2つの番組を比較してみたい。

「日本のひずみを考える、夜の街で働く女子大生」(2000年2月23日放送)

ナレーションと資料映像によって、女子大生の就職率が低下し、2人に1人が就職できない状況があるというテーマ設定の理由が説明される。女子大生がキャバクラなど性風俗産業で働き40万～60万の月収を得ている事実と女子大生の就職難とが関連するという解釈枠組みが提示される¹⁵。

性産業で働く「女子大生」が「社会勉強になる」という自己正当化をしたのにたいし、スタジオのニコラ・ロレッタ・ナカシマ（スリランカ、学生、女性）などから次々に批判や質問が浴びせられる。日本人のコメンテーターも彼女らに批判的である。

「借金を返し終わったらこんなアルバイトすぐ辞めます」との自己弁護にも批判が集まる。しかし、その段階でたけしが女子大生と「外国人」には基本認識があると指摘す

脚注

14. VTRをみると、この回は司会の江口ともみの衣装が番組前半と後半で異なっている。元来別個の2本の番組として収録されたものを1本に編集したと思われる。

15. スタジオに登場した「女子大生」の顔は映像上ボカしてあり、大学名も見せず、仮名で年齢と学年、職場ジャンルが提示される。

る。性産業で働くことについて「外国人」発言者は否定的前提で議論しているが、スタジオに来ている「夜の街で働く女子大生」はこの仕事に肯定的なのである。女子大生は戦後日本社会の犠牲者だという見方をゾマホンが提示し、「もっとキレイな仕事」に就くよう説得しようとして女子大生の反発と嘲笑を受ける。

理由はともあれ性産業で働く女性を非難する論調に対して「これは女の子だけの問題ではなく、そうした店に行く男性の問題でもある」、(ネジャット・シャニーノ/エリトリア, 通訳, 女性)という問題提起がなされ、拍手を受ける。この提起は「男が悪いという問題ではない。現代日本はこうした風俗が成り立つ国になっており、ホストクラブに勤める男子学生もいる」(テリー伊藤)という現状認識によって反論されるが、ゾマホンは強く反発する。その後も「女性の地位を社会的に低下させることに貢献しているとは思わないか」(ナディーム・カディル/パキスタン, 学生, 男性), 「病気感染を心配しないのか」(エバ・サチコ/インドネシア, 女性), 「お客はエイズ検査に行っているのか」(アレクサンドラ・ヘーフェリン/ドイツ, 語学教師, 女性), 「女子大生というブランドを利用せず、大学を辞めてからにせよ」(蘇毅/中国, 学生, 男性)などと批判がなされる。

女子大生批判のパターンが一通り出そろったところで、「夜の街で働く女子大生」というこの番組の問題提示の枠組み自体を崩す提案がなされる。つまり、「みんな考え方が逆だ。女子大生がこの仕事をやっているのではなく、この仕事をしている彼女たちが大学へ行っているだけなのだ」(たけし)と。

後半の議論は会員制クラブで働き「私は選ばれた女、留学資金のためと割り切ります」という女性の主張から始まる。しかし、イギリス留学を目指す彼女が英語を話せず、優越感という日本語も知らないことから日本側コメンテーターにばかにされ、日本社会のジェンダー秩序をめぐる議論へと広がる。「この社会は男性さえよければいいという風に聞こえる。男性のストレス発散の場さえあればいいなら女性はどうか」(マンズール・ジャーニュ/セネガル, 会社員, 男性)という意見にRIKACOら女性が強く賛同したのに対し、「夫が帰っても掃除もしていないし、化粧もしていないボロボロの妻なら家に帰りたくない」(クレメント・アダムソン/ガーナ, バーの店員, 男性)と反論があり、スタジオ内は騒然となる。この対立は「魅力がなくなるのは女性だけの責任ではなく、女性の魅力を減退させる男性の責任でもある」というRIKACOの発言が大きな拍手で歓迎されることで決着する。

さらに、性風俗産業で働くストレスを発散する方法、愛情に基づくセックスと仕事でするセックスの区別、大学を出たら性風俗の仕事を辞め普通に就職し結婚するという女子大生自身の将来予測などをめぐって議論が展開する。「夜の街で働く女子大生」たちの自己正当化を覆そうとする質問や反論が行われ、対立が続く。

最終的には「私は異常に性欲が強いんです。こんないいアルバイトはありません」と発言し、大義名分ではなく自己の欲望に従い、高収入も得ており、一挙両得だと自己肯定をする女性をクローズアップし、これには「文句のつけようがない」という形で締めくくられる。番組冒頭の問題提起は女子大生の就職難(就職差別)に発していたが、最後は性的な好みという個人レベルの話になり、たけしは「この人は少し病気だからレベルが他と違う」というセリフと笑いで締めくくった。性産業にネガティブなイメージを持つ「外国人」とそれを覆そうとする女子大生の対立を通じて、「外国人」に代表される「良識ある人々」のステレオタイプ化した発想を刺激し、攪乱する狙いは成功をおさめたといえよう。

「日本の立派な女子大生たち」(2002年2月28日放送)

番組が終了を迎える直前に放送されたこの回でも「夜の街で働く女子大生」と同様に

番組冒頭のアナウンスと資料映像によって、不況で失業率が高まり、女子大生の就職率が低下し、2人に1人が就職できない状況を説明し、テーマ設定の理由とした。その上で「女子大生が就職できないのは、社会の問題なのか」とむしろ女子大生の側の原因に注目するという解釈枠組みが提起される。続いてVTRでユーロ、ドメスティック・バイオレンスなど「女子大生」の時事用語の知識を確かめる「街頭抜き打ちテスト」の結果が示される¹⁶⁾。

正解が少なかったことを揶揄するアナウンスの後、スタジオの女子大生50名にも「小泉首相の前の首相の名前」や「バリアフリー」について答えさせた結果と珍回答を紹介し、続いて「一般教養編」として世界地図やことわざについての街頭でのテスト結果(VTR)とスタジオの女子大生に行った結果を提示する。番組は、女子大生にはいかに「常識」や「教養」が欠けているかをアピールしたうえで、その結果への女子大生の自己弁護や自己正当化をとりあげて展開していく¹⁷⁾。

「ニュースやっている時間に家にいないし、周りに間違いを教えてくれる人もいません！」という自己弁護に対してスタジオのコメンテーターは「必要がないわけだよ。普通の学生生活送っていても」(テリー伊藤)など同情的な態度を示す。一方「あなたたちよく大学行っているね。恥ずかしくない?」(ペヒィ・フェルナンデス/スペイン、貿易会社顧問、女性)、「日本の学校では政治や重い話題をすると仲間はずれにする。そのために彼女たちが勉強するのをブロックしている。そういう意識をなくした方がいい」(エインドリー・イー/ミャンマー、英語講師、女性)という批判が「外国人」女性からなされている。

「女は少しバカな方が助けてもらえるし、友達もできるんです！」に対しては、日本人女性コメンテーター側も苛立ちを隠さない。「外国人」女性は、「ただ友達ができて幸せになれるわけではないし、だいたい何で助けてほしいの、人に?」「自分がかわいいと思っているの、ばかじゃない、それ」(ニコラ・ロレッタ・ナカシマ/スリランカ、学生、女性)と強く批判する。

さらにスタジオに登場した女子大生の中の数人に対して行った「電話応対チェック」(上司にかかってきた電話に適切に対応し、正確なメモを残せたか)の様子をVTRで見せ、敬語や謙譲語が使えず、メモも不完全で使い物にならないことを示す。この結果に対して「私は教えてもらわないと何もできません!」という責任転嫁の発言がテロップで示され、この発言に対しても「外国人」女性から「すごく甘えているように見える」(マリア・フェルナンデス/スペイン、通訳、女性)と強い批判があった。

最後に、やはりVTRで、スタジオに登場した女子大生25名に「ロールキャベツ」「カニクリームコロッケ」をレシピなしでつくらせるテストをして結果を見せる。仕上がりの料理を「外国人」男性2人が試食し、惨憺たる結果であることを語らせ、笑いを取り、最後にスタジオで料理の専門家があるコメンテーターの結城貢が「朝食を必ず摂ること、四季ごとに一つの料理を覚えること」とアドバイスして番組は終了する。

2 番組の比較 2年間で逆行した女性のステレオタイプイメージ

同じく女子大生を扱ったが、2002年に放送された番組の方が番組全体を通じて「愚かな女子大生」というステレオタイプを意図的に利用し、また作り上げていることは明ら

脚注

16. VTRでテストされているのは短大生、専門学校生が大半であるのに、テロップでは「女子大生」というカテゴリーが用いられており、テーマタイトルのカテゴリと合致しない。

17. この回にスタジオに出演した「女子大生」の顔はぼかしもなく、氏名・大学名・学年を名札で明示している。

かであろう。

VTRの「街頭抜き打ちテスト」では、正解した女子大生は提示されない。また男子学生や一般社会人にはテストをせず、比較データなしにテスト結果の悪さで女子大生の就職難の原因を説明する番組上の解釈は強引である。さらに、「女は少しバカな方が助けてもらえるし、友達もできるんです!」「私は教えてもらわないと何もできません!」など、テロップで示された女子大生側の主張は、いずれも「受け身の愚かな女性」という否定的な女性のステレオタイプ・イメージに合致しており、就職率が低いのは女性側の無知や努力不足であるという番組の主張を裏付ける証拠として利用されている。テストとして行われた「電話の取次ぎ」「料理」も、女性の伝統的性役割としてイメージされる補助的業務や家事役割である。4半世紀前に批判されたCMの性別役割分業描写をそのままなぞるような、女性が料理づくり男性が批評する構成は、「料理がうまくない女性は女性失格である」という価値観に基づく伝統的なジェンダー規範に依っている。料理能力は女性の就職率とは無関係なのに、料理ができない 能力がない 就職できないのは当然、という展開になっている。

2002年の番組では2000年の番組に比べ「外国人」の発言は極めて少ない。名前を明示した男性の発言はゼロで、女性は4名と、146本の番組中、女性の発言の方が多かった例外的な番組である。しかも女性の発言はすべて女子大生を強く批判する立場でなされており、「女性が女性を批判する」構図である。その発言は結果的に「愚かな女子大生」のステレオタイプを強化し、女子大生の就職難の現状肯定に貢献する。番組全体として、女子大生の就職難は女性差別などではなく女性側の要因によるもので、女性の意識や行動が改まらないと改善しない、というメッセージになっている。テリー伊藤もたけしも番組が前提としたジェンダー規範やそれに基づくパターン化した構成を覆すことなく進行した。

これに比べ、2000年放送の「日本のひずみを考える、夜の街で働く女子大生」はさまざまなタイプの「夜の街で働く女子大生」を取り上げ、その現象に多様な視点から議論を行うことで、むしろ性風俗産業で働く女性についてのステレオタイプ化した発想を崩していくことが意図されていたようにみえる。同じ学生としての「女子大生」「外国人」の対立、性産業に否定的な「外国人」と比較的寛容な日本人コメンテーターとの対立、性産業を成立させる性の二重規範をめぐる対立、「いい子(女性)」とはどんな女性を指すのかという価値観をめぐる対立、「自由とだらしなさ」の解釈をめぐる対立など、さまざまな軸をめぐる討論が展開され、進行役のたけしも、コメンテーターのテリー伊藤と共に、議論が単純な「夜の街で働く女子大生」批判とはならないように工夫した進行やコメントを行った。

日本人のサブカテゴリーとして「夜の街で働く女子大生」というカテゴリー化を行うこと自体は、女性を性的対象物としてとらえる通念に沿った設定である。しかし、セックスワークと勉学を並置し、自己の逸脱的な性的欲望を肯定する女性の語りは、「性産業における被害者としての女性」イメージに亀裂を生じさせた面もある。番組は、「外国人」対「日本人」という形を借りて、近代的なロマンティックラブ・イデオロギーに基づく性風俗産業批判や、学生の本分は勉強であるとする「良識」と、そうした「良識」に従わず自らの性的欲望に基づいて行動する女性たちのリアリティを対決させ、性の二重規範と性別分業に支えられてきた日本社会のジェンダー秩序におきている揺らぎをかいま見せた。

基本的には、興味本位の男性の視点で女性の性をテーマ化することを特徴とする番組だったが、討論比率が多い時期には、ジェンダーについての多様な読解を可能にする場面が視聴者に提供されていた。

2001年度以降、番組構成上討論時間が減り、しかも外国人の発言部分を少なくして日

本人の当事者をスタジオに招くようになるにつれて、番組が旧来の伝統的なジェンダー観への傾斜を深めていった様子が、この2番組の比較からはっきりする。最終ラウンドで放送された「日本の立派な女子大生たち」はその典型であろう。「基本法」や女性差別撤廃条約といった取り組みに反発を感じている一部の視聴者のいただいている女性蔑視のジェンダー意識に迎合する内容になっていたといえる。

▶ 6 結 論

日本社会のジェンダー変容を目指す政策が進んだ時期に、この番組が果たした役割は複雑で多義的である¹⁸⁾。無名の「外国人」「日本人」によるセクシュアリティをめぐる主張や性別分業批判、ジェンダー規範にとらわれない強烈な自己主張や相手への罵倒を見聞きできるこの番組の視聴は、視聴者にとっては、ときとして自己のジェンダーを揺さぶられるスリリングな経験であったろう。視聴者のリテラシーによって多様な「読み」の可能性をもつバラエティ番組の可能性を具体的に示していたからである。

「外国人」はこの番組で結局どんな役割を果たしたことになるのだろうか。番組は、否定的な女性イメージを利用することで「問題ある女性」の話題を提示する。視聴者の「くいつき」を狙うためである。「外国人」は、狙いどおりの反応や過剰すぎる反応をする。その反応が過激であるほど、番組は盛り上がる。伝統的ジェンダー規範を信念とするアジア・アフリカ男性、自由をより重んじた発言をする欧米人、平等規範を重んじる中国人など「外国人」がパターン通りの意見をいうことで、対立が生まれ議論が活発になった。テリー伊藤やたけしは、戦略的に伝統的な女性のステレオタイプや男女の関係性、規範的なセクシュアリティにこだわらない発言をして、定型的な発想パターンを崩し、議論を攪乱する仕掛け人であった。

視聴者にもっとも強い印象を残したゾマホン・ルフインは、番組全体の構成するジェンダーに重要な貢献をしたと思われる。セクシュアリティに関する彼の主張は一貫して保守的であり、討論場面での激しい思い込みに基づく主張は、番組内で出演者から非現実的だと嘲笑された。しかし番組では彼のもう一つの面として、祖国愛や学校設立のための活動を繰り返し称賛とともにとりあげた。こうした表現を通じ、番組全体としては性道徳やジェンダーに関する彼の主張を間接的に支持したのである。番組スタート当初の「日本人のここがヘン」という指摘は、さまざまな外国人の視点で行われていたが、「トラブルとしての女性」を数多くテーマ化するようになった時点で、番組制作者は「ゾマホン・ルフイン(のような考えをもつ人物)がどのように反応するか」をかなり意識するようになっていく。

ゾマホンのような主張は、「常識的」日本人であればテレビのような公的な場で口にしなくなった「古い」ジェンダー観である。しかし「女性は結婚するまで処女でいなければならない」「女性は仕事より家庭を大切にすべき」といった彼の主張に同感する視聴者もまだ多いだろう。「男女共同参画社会」への取り組みは、こうした「オトコの本音」が表出しにくい言説空間をつくりだす。番組は、「愚かな女性」「性に奔放すぎる女性」といった女性の否定的ステレオタイプイメージを強調することで、こういった「オトコの本音」に正当性を賦与する効果をもった。ゾマホンは女性テーマの番組でもほぼ毎回同

脚注

18. 日本のテレビ番組では、男女平等やセクシュアリティ、男女の関係性が議論され、フェミニストの主張が行われることはほとんどない。「たけしのテレビタックル」(テレビ朝日系)におけ

る田嶋陽子は例外的だったが、むしろメディアは彼女によってフェミニストのステレオタイプイメージを作り上げ、パッシングの対象にしている。

じ主旨の発言を繰り返した。「戦前の性教育に戻れ」「アメリカの真似をするな」といった主張は彼の愛国心の表明とセットになって、視聴者の「ぶちナショナリズム」(香山, 2002)と共鳴しやすいものであった。

番組は後期になって、「愚かな女」を嘲笑することで溜飲を下げるタイプの視聴者におもねるようになった。その際、愛国者ゾマホン、伝統的モラルを重んじるゾマホンは、番組メッセージの危うさを脱色化する役割を担ったのではないだろうか。

民法改正や各自治体での男女共同参画条例の制定など、男女共同参画社会の実現に向けた議論の場で、性別をどうとらえるかが争点となっている。まさにそれぞれのジェンダー(性・性別をめぐる知の体系)が問われているのである。「ここがヘンだよ日本人」の軌跡を辿ると、テレビ番組は継続することによって内容を深化させるのではなく、問題設定を単純化しステレオタイプ化する様子が見取れる。番組は「多様な立場による討論の場」であることを放棄し、ステレオタイプに固着することで固定的な性別規範に回帰し、ジェンダー変容を受けいれない「暗黙の合意」をつくりだすイデオロギー装置の一部となった。

制作者がこのような経緯をどう解釈しているか、また視聴者が番組のジェンダーをどう読み取ったかについては今後の研究課題としたい。

謝 辞

本稿での分析にあたっては、満森圭(都立大学大学院)・小野由理(シネマとフェミニズム研究会)両氏の協力を得ました。記して感謝します。

引用・参考文献

- 江原由美子(2001)『ジェンダー秩序』勁草書房
 古橋源三郎(2000)「男女共同参画社会基本法制定上の経緯と主な論点」大沢真理編『21世紀の女性政策と男女共同参画社会基本法』ぎょうせい
 井上輝子(1992)『女性学への招待』有斐閣
 石田佐恵子(2000)「メディア文化研究におけるジェンダー」吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』せりか書房
 岩淵功一(2001)『トランスナショナル・ジャパン』岩波書店
 笠間千波(2001)「解釈共同体としての『やおい』サブカルチャー」三宅義子編『現代の経済・社会とジェンダー』第3巻日本社会とジェンダー』明石書店
 川崎市ジェンダー指標研究会(2001)『かわさきジェンダー指標』川崎市男女共同参画センター(すくらむ21)
 香山リカ(2002)『ぶちナショナリズム症候群 若者たちの日本主義』講談社
 行動する会記録集編集委員会編(1999)『行動する女たちが拓いた道 メキシコからニューヨークへ』未来社
 国広陽子(2001)『主婦とジェンダー』尚学社
 水尾裕之・三田格(2002)『目覚める日本人!!! ここがヘンだよ日本人』河出書房新社
 内閣府編(2002)『平成14年版男女共同参画白書』財務省印刷局
 小野俊太郎(2001)「ジェンダーとセクシュアリティ」吉見俊哉編『カルチュラル・スタディーズ』講談社
 大沢真理(2000)「女性政策をどうとらえるか」大沢真理編『21世紀の女性政策と男女共同参画社会基本法』ぎょうせい
 大沢真理(2002)『男女共同参画社会をつくる』日本放送出版協会
 斎藤美奈子(1998)『紅一点論』ピレッジセンター
 坂本佳鶴恵(1997)『<家族>イメージの誕生』新曜社
 上野千鶴子(1995)「差異の政治学」上野千鶴子編『岩波講座 現代社会学11巻 ジェンダーの社会学』岩波書店
 山下泰子(2000)「女性政策をめぐる動き 国連・国・自治体」大沢真理編『21世紀の女性政策と男女共同参画社会基本法』ぎょうせい
 Zoonen,L.V.(1991)“Feminist Perspectives on the Media” in *Mass Media and Society*(=1995,平林紀子訳「メディアに対するフェミニズムの視点」児島和人・相田敏彦監訳『マスメディアと社会 新たな理論的潮流』勁草書房)

(国広陽子 武蔵大学社会学部教授)